

令和元年度 「生徒自身による『私たちのネット利用ルール』づくり」 活動推進実践報告書

1 学校の概要

- (1) 学校名 埼玉県立川越高等学校
- (2) 学級数 (5月1日付け) 28クラス
- (3) 生徒数 (同上) 1129名
- (4) 教職員数 (同上) 92名

2 「私たちのネット利用ルール」づくりについて

(1) 取組内容 (決定までのプロセス)

生徒の実態を捉え、その実態に合った適切なアプローチを考えられるよう取り組んだ。

そのため、7月にアンケートを実施し、本校のネット利用の分析を行った。その上で8月のワークショップに臨み、アンケートから作成した資料を持参し、各校の代表者に説明を行った。ワークショップでは時間制限などのルールだけでなく、ネットの良い部分も活かし、ネットに寄り添ったルールのあり方を考察した。

2学期からは、校内でどのようなルールづくりをすべきかを生徒会中心に考え、全校生徒にもアンケートを行い、アイデアを募った。アンケートを回収し、仕分けを行い、再度どのようなルール策定が望ましいかを生徒会内部で話し合った。アンケートの中には、例えば放課後に希望者を対象にしたセキュリティ講座を開いたり、そのときに話し合いを行ったりするなど、生徒会内部では思いつかないような意見もあった。

(2) 全校への周知の方法

- ・7月と10月に行ったアンケート
- ・意識調査・新聞部が発行する『川越高校新聞12月号』
- ・生徒会が発行する機関紙『嶺上開報8号』(1月発行)

(3) 私たちのネット利用ルール

個人でできること、学校でできること、家庭でできることに分け、ルールを策定していった。ルールの策定に関しても、意識する点と実行する点を分けて行った。これは、意識していても実行されなければ意味がないし、実行される上では意識することが重要であるという、生徒会内部での話し合いによるもの。以下が本校でのルールとなる。

●意識する点

- ・不特定多数の人間と繋がっていることを意識する
- ・匿名に甘んじない



8月のワークショップの様子

● 実行する点

- ・ 送信する前に間を作る
- ・ 個人情報に繋がるものを上げない
- ・ 友人と意識の共有をする

なお、本校の校風は「自主・自立」であり、校則もない。そのような学校のあり方を踏まえると、強制力が強く具体的すぎるルールは望ましくないと生徒会では考え、考える余白を残したルール策定となった。

3 活動推進校独自の取組（広報活動）について

（1）活動内容

新聞部が発行する『川越高校新聞 12月号』に活動の内容、進捗状況、アンケートの生徒の意見、ビジョンなどを掲載してもらい、全校生徒に配布した。また、生徒会機関紙を1月に発行し、ネットルールの提言と生徒会からのスマホ利用に関するメッセージを掲載した。

（2）実施期間

『川越高校 12月号』に掲載してもらうため、11月に取材を行った。また、機関紙の作成を12月から始めた。

（3）その他

アンケートの配布・回収・集計は、各学級のHR委員もしくは生徒会の生徒が行い、活動の最初から最後まで生徒自身で行った。

4 活動の成果と課題

（1）成果

学校全体に関しては、ネットルールについて考えていない人もアンケートや学校新聞、生徒会機関紙を通して、意識を向上することができたのではないかと考える。また、アンケートや意識調査の内容をみると、ネットルールに関して意識をしている人が想定していたよりも多かった。

生徒会内部の成果としては、アンケートや意識調査を通して生徒自身が新しい考え方に触れることができ、視野が広がったことが挙げられる。また、1月のパネルディスカッションを通して、生徒自身が学ぶだけでなく、ネットに明るくない世代に対しても知ってもらう機会を増やし、考えてもらう機会を増やすため、発信していくことの重要性なども感じることもできた。

（2）課題

周知が広い活動で行えなかったことが挙げられる。要因としては、生徒自身が文武両道で多忙であったことと、今年度本校が120周年記念であったこともあり、生徒会の仕事もあったことが挙げられる。

また、8月のワークショップや1月のパネルディスカッションを通じて、生徒自身の知識不足や、伝え方・発表の仕方などの至らない点を再認識したようなので、この気づき自体は次に繋がる前向きなことであると考えられる。